

月曜評論

中嶋 嶺雄



国際政治の多極的な進展にと
もなつて、わが国をめぐる国際
環境もまたきわめて流動的な状
況にあるが、そうしたなかで、
一九七三年は、わが国にとって
きわめて教訓的な一年であつた
はずである。第一に、全地球的
な意味での資源・エネルギー問
題が論議されてきた矢先、第四
次中東戦争の余波で中東からの
石油供給に一時支障が生じたこ
とは、わが国の広い意味での安
全保障の問題を、さしせまった
課題としてより深く再検討すべ
きことを気づかせずにはおこな
かつたはずである。第二には、
経済大國といわれたわが国の基
本的体質における脆弱性が露呈
された反面、わが国にたいする
多極世界の挑戦が石油危機の背
後においてしむじむと開始され
ていることを知らされたことは、
日本外交の将来の方向と目
標の設定の再検討をさしせまっ
た課題として要求したはずであ
る。この点で、米中関係の改善
や中ソ対立の激化は、好むと好
まざるにかかわらず、日米安
全体制の意味の大きな変化を促
進してあり、この問題ではソ

連や、とくに最近の中国の態度
に決定的な変化がすでにみられ
つつある。このように流動的な
国際環境の変化とその現実を、
いまこそ冷静かつ広汎に分析
し、わが国の広い意味での安全
保障の問題を再検討し、政策化
してゆかねばならないにもかか
らぬ、この問題について重要な問
題についての関心が、わが国の
安全保障の問題とも関連して喚
起されねばならない時期に近づ
きつつあることをここでは指摘
しておきたい。

ちなみに毛沢東主席は、はや
くも一九五七年四月、日米安保
に処置するのと同じ重要な問
題について、

西沙事件と安全保障

わが国、これら問題について

条約と中ソ友好同盟相互援助条

約の関係をいふべき、一方における

えはこの問題が、

その一端はまたにも書いてきた

は与野党ともに、依然として十
年、二十年、いや三十年一日の
本がアメリカから完全独立し、
ごとき価値観の問題ないしイテ
軍国主義が復活することがなく
なり、外部から利用されること
オロギーの問題としての不毛な
議論のなかでなれあっているの
もなくなり、侵略の脅威がなく
みで、国際関係の現実を即した
政策的な提言は、ほとんどなさ
れていない。

わが国、これら問題について
条約と中ソ友好同盟相互援助条
約の関係をいふべき、一方における

えはこの問題が、
この問題が、

その一端はまたにも書いてきた
その一端はまたにも書いてきた

その一端はまたにも書いてきた
その一端はまたにも書いてきた

その一端はまたにも書いてきた
その一端はまたにも書いてきた

進してあり、この問題ではソ
連や、とくに最近の中国の態度
に決定的な変化がすでにみられ
つつある。このように流動的な
国際環境の変化とその現実を、
いまこそ冷静かつ広汎に分析
し、わが国の広い意味での安全
保障の問題を再検討し、政策化
してゆかねばならないにもかか
らぬ、この問題について重要な問
題についての関心が、わが国の
安全保障の問題とも関連して喚
起されねばならない時期に近づ
きつつあることをここでは指摘
しておきたい。

わが国、これら問題について
条約と中ソ友好同盟相互援助条
約の関係をいふべき、一方における

えはこの問題が、
この問題が、

その一端はまたにも書いてきた
その一端はまたにも書いてきた

その一端はまたにも書いてきた
その一端はまたにも書いてきた

その一端はまたにも書いてきた
その一端はまたにも書いてきた

(東京大助教授)